

尾高城関係年表

室町	1524 (大永 4) 年	出雲の尼子経久が伯耆に侵攻し、尾高城主・幸松氏、敗走。尼子方の吉田光倫が尾高城に在番。
	1562 (永禄 5) 年	毛利元就が山陰出兵し、尼子氏の本拠・富田城を攻める。幸松氏は尾高城を奪回する。
	1563 (永禄 6) 年	幸松氏が病死。家督を継ぐ形で備後神辺城主である杉原盛重が尾高城入城。
	1566 (永禄 9) 年	尼子義久が降伏して富田城落城。毛利氏支配の西伯耆は尾高城主杉原盛重が統括。
	1569 (永禄 12) 年	尼子勝久ら尼子再興戦を展開、末吉城 (大山町) ほか 15 城を奪還。
	1571 (元亀 2) 年	吉川元春、末吉城を攻略。山中幸盛 (鹿介) を捕え、尾高城に送るが脱出される。尼子勢力撤退。
戦国	1581 (天正 9) 年	杉原盛重、八橋城 (琴浦町) にて病死。
	1575 (天正 3) 年	島津家久日記に「緒高といへる城有、其町を打過」の記述があり、城と城下町があった。
	1582 (天正 10) 年	杉原景盛 (二男)、尾高城二の丸で兄・元盛を殺害する。翌年景盛は、毛利氏に討たれる。
	1584 (天正 12) 年	吉川広家の家臣・吉田肥後守が尾高城に在番。
	1591 (天正 19) 年	吉川広家、東出雲、西伯耆、隠岐の領主になり、月山富田城へ入城、米子城の築城を開始する。
江戸	1600 (慶長 5) 年	関ヶ原の合戦後、中村一忠が駿河国駿府から伯耆 18 万石領主となり、一時的に尾高城へ入城する。
	1601 (慶長 6) 年	中村一忠、完成した米子城へ移る。尾高城は米子城を本城とした支城体制に組み込まれる。
	1615 (元和元) 年	一国一城令。これ以降に尾高城は廃城か。

国指定史跡

おだかじょうあと

尾高城跡



尾高城イメージ図



交通アクセス

JR：米子駅または伯耆大山駅から路線バス（観光道路経由本宮・大山線）乗車、「尾高上」下車徒歩約 5 分
 車：JR 米子駅から車で約 15 分 米子自動車道米子 IC から約 5 分
 尾高城梅園駐車場（無料）をご利用ください。

国史跡 尾高城跡

土塁の城から石垣の城へ
城の改修と城主の変遷が分かる城

- 尾高城とは -

尾高城は、別名「泉山城」とも呼ばれ、大山山麓西伯耆一円を見下ろす標高約40mの段丘先端に築かれた中世城郭です。山陰道、日野往来との結節点に位置し、米子城がでるまでの西伯耆の交通、軍事の拠点でした。

南北約400m、東西約300mの範囲に広がる城域には、当時の情景をうかがわせる堀や土塁が良好な状態で残っています。城内には北側から二の丸、本丸、中の丸、天神丸、背後に越ノ前郭、南大首郭など9つの郭が配置されています。また、発掘調査によって石垣や石塁が発見され、土塁の城から石垣の城への様相の移り変わりと、城主の変遷が考古学的な手法によって明らかになったことが評価され、令和5年度(2023年)に国の史跡に指定^{*}されました。 ^{*}告示をもって正式な指定

発掘調査の成果



本丸・二の丸石垣

令和4年度の発掘調査により、本丸の北側と二の丸の南側にある堀の両側から石垣が確認されました。石垣の築石や裏込め層の栗石が崩壊している様子から一国一城令による廃城の際に行われた破城の痕跡だと推察しています。

堀には、木橋が架けられていたと考えられます。



本丸で検出された石塁

本丸

本丸は尾高城跡の段丘縁辺部の北西-南東方向に配された郭群の中心となる城内最大の郭で、東辺~南辺~西辺にかけて土塁が築かれています。

令和4年度の発掘調査では、本丸を囲う土塁の構造を調査したところ、西側に石塁(石を積んだ基礎)が検出され、形状から築地塀と虎口、門などの基礎と考えられています。



方形館跡

土塁は残っていませんが、発掘調査によって基底部が確認され、北・東・南には土塁が巡っていた、大きな平坦面を持つ整然とした方形郭であることが判明しています。

また、内部には大型の柱穴が確認され、建物が数棟存在していたと考えられます。



南大首郭の西側隅櫓跡

南大首郭

南大首郭の東側と南側には土塁が確認され、西側隅に櫓状の建物が確認されています。東側の空堀には大きな柱穴が見つかり、堀の中央には木橋がかかっていたと考えられます。現在は、土塁と木橋が復元されています。

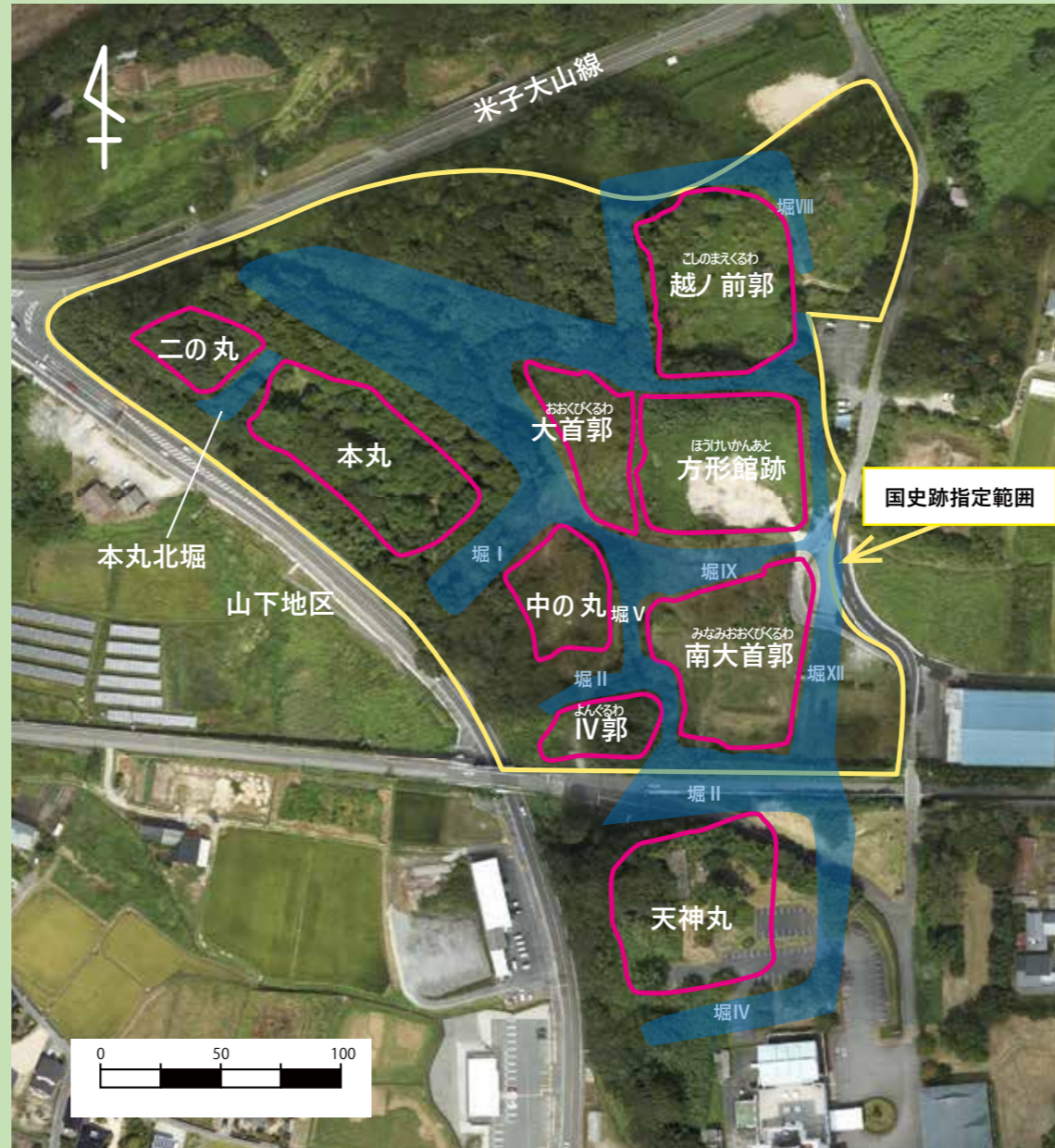
また、空堀の外側に建物群が確認され、これらは文献に現れない鎌倉時代まで遡り、尾高城に先行する領主の館だと考えられます。

尾高城の歴史

尾高城の始まりは定かではありませんが、鎌倉時代に遡るとされ、室町時代には山名氏の一族である、幸松氏が居城したと伝わります。

大永4(1524)年、領土拡大を進める出雲の尼子経久による伯耆侵攻により幸松氏は国外退去を余儀なくされ、尾高城も尼子氏の支配するところになりました。その後、毛利氏の山陰侵攻により、幸松氏は再び尾高城を奪還するも、間もなく病死したことから毛利家臣の杉原盛重が城主となり、毛利・吉川氏の伯耆支配の中心となり活躍しました。尾高城はこの時代、戦国城郭として整備されたと考えられます。天正9(1581)年、盛重の死後、杉原氏内紛を経て尾高城は吉川広家の管下において西伯耆の拠点とされた可能性が高いと考えられています。

慶長5(1600)年の関ヶ原の合戦後、伯耆国の領主として駿府から入国した中村一忠が米子城が完成するまでの間、尾高城に入城したと考えられます。その後、尾高城は米子城の支城として組み込まれますが、一国一城令により廃城になったと推定され、約400年間の歴史を閉じました。



南大首郭と中の丸間の空堀

中の丸

尾高城跡 遠景(東から)

尾高城の変遷

文献資料及び発掘調査に基づき、尾高城の変遷は以下の5期に分けられます。

第1期 先行建物期(鎌倉時代前期 13~14世紀)

文献記録には表れませんが、発掘調査において南大首堀外に四面庇付礎石建物が確認されたことから、有力な在地領主の住居があったと推察されます。

第2期 方形居館期(室町時代 15世紀)

天神丸・方形館などの方形郭群で遺物が出土しており、この時期に中世城館としての尾高城の原型が作られます。

第3期 山城+方形居館期(戦国時代)

前期:幸松氏 1515?年~1564年、後期:杉原氏 1564年~1583年

大規模な空堀と土塁を巡らせた郭が整備され、郭内部でも建物遺構が確認されています。方形郭群に加えて、本丸・二の丸などの山城の整備が行われ、尾高城が戦国城郭として本格的に整備されます。

第4期 石垣整備期(戦国時代末期)

吉川氏 1584年~1600年

本丸北堀で確認された石垣が築かれ、本丸北端に築かれていた土塁と切岸を16世紀末の段階で石垣へ改修し、近世城郭に移行させています。城郭要所に石垣、石塁が築かれ、土塁の城から石垣の城への大変革が行われます。

第5期 支城・廃城期(江戸時代初期)

中村氏 1600年~1609年、加藤氏 1610年~1617年、池田氏 1617年~

慶長5(1600)年の関ヶ原の戦後、岩国に去った吉川広家に替わり、中村一忠が一時的に居城し、その後米子城へ入城すると、米子城を本城とする支城体制に組み込まれました。一国一城令により廃城となります。

尾高城の遺物

尾高城跡の発掘調査では弥生時代の終わり頃から江戸時代初め頃までの土器・陶磁器や金属器、中国銭などの遺物がたくさん出土しています。その中で最も数が多いのは、中世の陶磁器の破片です。

特徴的なものは、「かわらけ」と呼ばれる素焼きの土器で、これは宴会の時などに使用される使い捨ての食器と考えられています。

また、白磁や青磁など、中国から輸入された陶磁器が出土しています。特に目を引くのは、中国の元時代に生産された染付壺の破片が2点出土していることです。元は13世紀に中国を征服して建国されますが、14世紀頃から中国江西省の景德镇窯において染付磁器の生産を始め、その製品は世界各地へ輸出された、珍しい出土品です。

このほかにも、天目茶碗や備前焼の花瓶が出土していることから、尾高城の城内で宴を開いたり、骨董品を飾る御殿や茶室のような建物があったと推察されます。



陶磁器

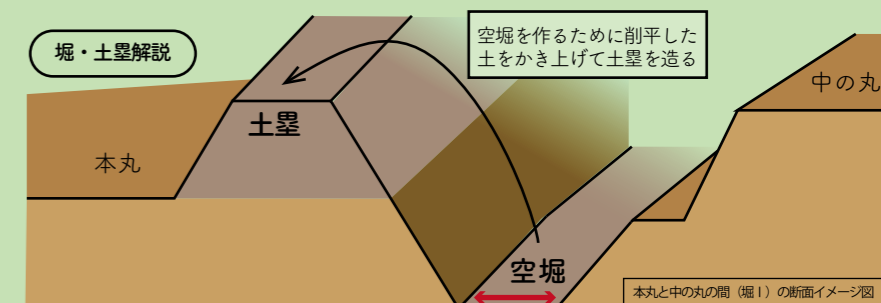


景德元寶 熙寧元寶 元祐通宝

中国銭



小柄



空堀:敵に攻められないように掘った人工的な大きな溝。水を貯めないのが空堀。
土塁:内部への敵の侵入を防ぐための盛土。敵から郭内が見えないようにする効果があった。